

昭和49（1974）年は大竹市が誕生して20年目の節目の年である。昭和29（1954）年9月1日に大竹市が誕生して以来、企業誘致による財政基盤の確立や、都市計画事業を推進し工業都市として着々と発展しつつある時代であった。市の歴史を俯瞰した視点でとらえたとき、この年、大竹市は創業期から発展期へと新たな段階に転換する分岐点となった年ではないかと思える。そんな歴史的出来事があった年である。

阿多田島壊滅の危機!?

この年の初め、大竹市は阿多田島壊滅の危機に遭遇する。

1月9日午後7時5分ごろ、阿多田島でタバコの火の不始末から山火事が発生したのである。出火場所は、島の南側で通称「岩室」と呼ばれている地区。早速、地元消防団が消火活動にあたったが、火勢は北に向かって広がり、島で最も高い高山（標高204m）の頂上を越えて、民家が密集する本浦地区に迫る勢いであった。

この事態を憂慮した市は、翌日午前2時に県知事を通じて陸上自衛隊に応援を要請するとともに、災害対策本部を設置した。要請を受けた陸上自衛隊第13師団の隊員236名は、午前6時20分に小方港へ到着、待ち構えていた海上自衛隊の輸送船に分乗して火災現場へ向かった。

地区の集落は、地元消防団を始め、自衛隊、海上保安庁、警察機動隊、市消防、米海兵隊等多くの人たちの協力で奇跡的に守られたのである。

※昭和47（1972）年8月8日、中華民国（現…台湾）の医師、陳永福医師が阿多田島診療所に着任している。

さらなる試練

阿多田島壊滅の危機を奇跡的に回避したのもつかの間、阿多田島にはさらなる試練が待っていた。山火事の原因はタバコの火の不始末とされているが、昭和48（1973）年11月から雨らしい雨が降っていなかったのも火災が拡大した一因であった。雨が降っていなかった阿多田島では、簡易水道の本浦貯水池（2700トン）の水が減る一方で、12月11日からは、毎日午前8時から午後4時まで断水という第1次節水の対策を採っていた。そして火災が発生した1月9日からは、断水をさらに強化し、午前6時から3時間、午後4時から4時間と1日7時間給水の第2次節水をするようになったのである。しかし給水制限には限度があり、市水道局は当面の飲料水を本土から運搬することにした。1月12日から3日間、三原市の給水運搬船を借りて1回に500トンの水を3回運び、本浦貯水池の水は何とか1500ト

また、米海兵隊岩国航空基地隊員約30名も上陸用舟艇で駆け付け、消防団や約40名の県警機動隊員とともに懸命の消火作業にあたった。さらに海上保安庁も市消防本部の要請に応じて巡視艇を派遣し、夜通し消防隊や機材の運搬に協力したのである。当時阿多田島航路にはフェリーは就航していなかった。

※大竹市は昭和30（1955）年4月13日に、米国海軍航空隊第955部隊と「消防相互援助協定」を結んでいた。

※阿多田島航路にフェリーが就航するのは昭和60（1985）年3月30日のことである。

これら各方面からの応援による700名近い消防隊は、尾根から海岸までの雑木を伐採し、枯れ草を刈り取って防火帯を作り延焼を懸命に防いでいった。陸上自衛隊員たちは

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

問い合わせ
企画財政課 ☎59-2124

第6回 阿多田島の危機から始まった「昭和49年」

市制施行20周年の年は、市にとってさまざまな出来事が起こり、大きな転換期を迎えた年といえます。そんな昭和49年を今月号と来月号にわたり振り返ります。

ンとなった。その後も第2次節水は継続されたが、1月21日、願いが天に通じたのか待望の雨が17ミリ降ったため、第1次節水に緩和され、窮地を脱している。

※本土からの海底送水管が完成す



玖波公民館



大竹駅落成式

消火液の入った噴霧器や水タンクを背負い、特製の「火タタキ」を持って、火の手を食い止めるため、山の斜面に展開しながらの必死の作業であった。

一方、阿多田島婦人会（現…阿多田区自治会女性部）も徹夜で炊き出しを行い、2年前に台湾から招聘さ



（上）消火活動に従事する陸上自衛隊員（下右）島の南側から出火した炎は島の約半分を焼き尽くした（下左）島に水を運ぶ小方港の給水運搬船。



れた陳先生の阿多田島診療所も夜間開業してけが人の手当てをするなど、島は大変な混乱ぶりであった。

懸命の消火作業の結果、1月10日正午には、さすがの猛火も火勢が衰え、午後1時半、島（面積239ha）の約半分にあたる110haを焼いてようやく鎮火したのであった。本浦

新しい駅舎に生まれ変わっている。鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積が839㎡の駅舎で、1階改札口の近くには大竹市の特産品展示コーナーが設けられ、紙や繊維、石油化学製品、ゴム手袋など市内の工業製品が展示されていた。当時大竹駅に停車する列車は特急が4本、急行が17本のほか快速電車など1日81本で、1日当たりの乗降客数は約6700人だった。（令和4年時点では1日114本、1日当たりの乗降客数は2700人）

駅舎の改築に先立ち4300㎡の駅前広場の整備は、昭和47年度事業で完成し、緑地帯に大きなワシントンヤシとツゲが植えられたのも、「みどりの窓口」が開業したのもこの時である。なお、令和5（2023）年2月、JR大竹駅の駅舎はちょうど半世紀ぶりに新しく生まれ変わっている。

鉄筋コンクリートの玖波公民館完成

現在の玖波公民館が、完成したのもこの年の9月である。鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積が1214㎡、各室には冷暖房が完備された最新の施設で、当時の予算で1億1千万円の事業費であった。半世紀もの長きにわたって地域住民の学習の場として利用されてきた玖波公民館も、令和8年度末には新しく生まれ変わる予定になっている。